

日本老年医学会 理事長 大内尉義

日本老年医学会は、他学会との連携を図りながら、老年医学の発展に寄与することを定款で謳っているが、高齢者疾患、特に認知症では福祉との連携も重要で、生活機能を重視した「包括的なアプローチ」を特徴としている。

第1の包括性はチーム医療であり、治療チームには、コメディカルだけでなく、患者・家族も加わる。会員の中で、家族教室の試みが広がっている。

第2の包括性は、認知症の予防から身体疾患を抱える終末期までを診る包括性である。終末期の人工栄養問題にも積極的に取り組んでいる。

第3の包括性は、医療と介護保険の双方の利点、欠点を知って、サービスを組みあわせて情報提供する機能である。退院支援や、認知症の地域ネットワーク、認知症カフェなど会員の活動は広がっている。これらの活動は学術集会にも反映され

シンポジウムなどの企画の42%が認知症関連であり、市民公開講座2題も含まれる。一般演題のうち、認知症関連が98題、29%をしめ、最も主要な領域になっている。

日本老年医学会学術集会 認知症関連題数

2011年

企画演題 90題	認知症関連	認知症割合
会長講演	1	
招請講演	1	
特別講演	1	
シンポジウム1	1	
シンポジウム3	2	
シンポジウム4	1	
パネルディスカッション4	1	
Ageing Science Forum	5	
若手企画シンポジウム	1	
ディベートセッション	6	
市民公開講座	2	
スポンサー共催企画	6	
ランチョンセミナー	8	
イブニングセミナー	2	
企画合計	38	42%
一般演題 335題		
認知症	83	
認知症と呼吸器疾患	1	
認知症と総合機能評価	3	
認知症とターミナルケア	2	
認知症と頸動脈・脳血管障害	2	
認知症と介護・看護	1	
認知症と在宅医療	2	
認知症と栄養・長寿	2	
認知法と神経・筋・精神疾患	2	
合計	98	29%

専門医教育では、認知症は診断、ケア、介護保険の利用など直接的な領域の他、総合的機能評価、在宅医療のなかでもとりあげられ、高齢者医療研修会を学会総会開催時、地方会開催時、全日本病院協会と共催で年10回程度行なっている。

老年病専門医は、1460名、各県での検索は、日本老年医学会ホームページ

[http://www.jpn-geriat-soc.or.jp/n\\_ninsen/ichiran.html](http://www.jpn-geriat-soc.or.jp/n_ninsen/ichiran.html)

から検索できる。高齢者医療研修会終了専門医は、各地で認知秘奥を含む高齢者医療の講習の講師として活用可能である。

かかりつけ医教育では、外部の有識者の査読をへて発刊した「健康長寿診療ハンドブック」を用い、認知症のセッションを重要視して、東京、大阪、名古屋など各地で啓発活動を開始している。

医師卒前教育では、全国25の老年医学講座で、認知症は独立した講義として行われている。老年医学講座のない大学生を対象に、サマーセミナーが毎年開催している。

一般向け書籍としては、認知症だけのタイトルの発行物はないが、認知症患者が在宅で穏やかに暮らすための「おとしよりとくらす」、認知症薬、精神神経病薬を含む高齢者の薬物療法指針として「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン」を外部の有識者の査読をへて発刊している。

学会が主体の研究活動は、老年医学会理事長が班長を務める、認知機能やADLなどの生活機能を「生活自立を指標とした、生活習慣病の検査値の基準値設定に関する研究」において、認知症の発症に関して、生活習慣病だけでなく、生活習慣との関連を、久山町、端野壮瞥町、大府市、土佐町、香北町など全国の有数のコホート研究を糾合したデータ解析を開始している（平成23～25年度）